



公益財団法人 日本対がん協会 「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です
〒100-0006 東京都千代田区有楽町2-5-1 有楽町センタービル(マリオン)13F
☎(03) 5218-4771 <http://www.jcancer.jp/>

主な内容

1面、2面 ピンクリボンフェスティバル2016
3面 厚労省人口動態統計(確定数)
4面、5面 特集 RFLJ2016 滋賀医科大学

ピンクリボンフェスティバル2016

「乳がん検診、もう行った?大切な人に声をかけてあげて。」をテーマに各地で開催

ピンクリボンフェスティバル(主催:日本対がん協会、朝日新聞社ほか)が、ピンクリボン月間の10月に合わせて開幕した。乳がんの早期発見・早期診断・早期治療の大切さを伝えることを目的に2003年から始まり、今年14回目となる。

9月末から原宿表参道や仙台駅前商店街のフェスティバルパナーの掲示が始まり、皮切りの10月1日には東京都庁前やレインボーブリッジ、神戸ポートタワー、明石海峡大橋などがピンクにライトアップされ、初秋の街を華やかに彩った。

東京ウオークは約4000人が参加

スマイルウオークは今年も東京、神戸、仙台で開催された。神戸大会はコースも一新、気軽に参加できる3キロコースを新設し、ファミリーやシニア層なども参加しやすくなった。

東京大会では女優の南果歩さん、神戸と仙台大会ではフィギュアスケーターの安藤美姫さんがゲストとして大会を盛り上げた。東京ではシンポジウムを開催し、乳がん専門医や精神腫瘍医の講演などを行った(2面に関連記事)。



ピンクのリボンが舞い上がってスタート

10月1日、フェスティバルの開幕を告げるスマイルウオーク東京大会が開催された。台風が近づく中、天候が心配されたが、最後までほとんど雨にもたたられず、思い思いのウェアにピンクのゼッケンをつけた約4000人の参加者が都心を歩いた。

発着会場の六本木ヒルズアリーナでは今年3月に乳がんの手術を受けたばかりの女優の南果歩さんと、北里大学病院乳腺・甲状腺外科科長の谷野裕一先生によるピンクリボントークも行われた。南さんは夫で俳優の渡辺謙さんに早期の胃がんが見つかり入院しているときに、病院に来ているからと受けた人間ドックで乳がんが見つかった。「私たちのような自由業や主婦の方な

ど、検診を受ける機会が少ない人も、ぜひがん検診を受けてください」と会場に呼びかけた。

南さんは、告知を受けた時は夢の中のような感じで現実感を持って受け止められなかったと語り、「これだけ身近な病気でも体験してみないとわからないほどの衝撃を受けることを痛感した。芸能人の頑張りは励みになると言ってもらえるので、これからもがんのことを積極的に発信していきたい」と力強く話した。

閉幕が近づくころ、アリーナに美しく力強い歌声が響き渡った。乳がん経験者で構成するゴスペルコーラスグループ、「プレストキャンサーサバイバーズコーラス(BCSC)」の登場だ。がん撲滅のためのチャリティーソング「Just Stand Up!」や「上を向いて歩こう」など数曲を披露した。乳がんの苦しみを乗り越えた歌声に会場内は爽やかな感動に包まれた。



表参道を歩く参加者たち

がん相談ホットライン 祝日を除く毎日
03-3562-7830

日本対がん協会は、がんに関する不安、日々の生活での悩みなどの相談(無料、電話代は別)に、看護師や社会福祉士が電話で応じる「がん相談ホットライン」(☎03-3562-7830)を開設しています。祝日を除いて毎日午前10時から午後6時まで受け付けています。相談時間は1人20分まで。予約は不要です。

医師による面接・電話相談(要予約)
予約専用 03-3562-8015

日本対がん協会は、専門医による面接相談および電話相談(ともに無料)を受け付けています。いずれも予約制で、予約・問い合わせは月曜から金曜の午前10時から午後5時までに☎03-3562-8015へ。相談の時間は電話が1人20分、面接は1人30分(診療ではありません)。詳しくはホームページ(<http://www.jcancer.jp/>)をご覧ください。

「いっしょなら、きっと乗り越えられる。」 ピンクリボンシンポジウム2016東京



満席となった会場

定員大幅に上回る780名が来場

東京・千代田区の有楽町朝日ホールで10月2日、ピンクリボンシンポジウム2016東京が開催された。「いっしょなら、きっと乗り越えられる。」と題して、乳がんの最新治療と心のケアについて専門医らが講演した。今年は2100人も応募があった。

講演は中村清吾昭和大学医学部乳腺外科教授と、渡辺亨浜松オンコロジーセンター院長と保坂隆聖路加国際病院リエゾンセンター長・精神腫瘍科部長の3名。トークには前日のスマイルウオークに続き女優の南果歩さんが登場し、現在治療中の自らの乳がん体験を

語った。

中村先生は「日本は先進国の中では珍しく、乳がんの発生も死亡も増えている」と現状を説明し、検診による早期発見を呼びかけた。マンモグラフィと超音波検査の比較実験(J-START)の結果や、遺伝性乳がんの動向など最新の情報を提供し、個別化に向かう乳がん診療の現状を語った。

た。

渡辺先生は「『抗がん剤は効きますか?』にお答えします」と題して講演。抗がん剤には「今ある症状への対策」と、「今後の症状の予防」の2つの目的があり、各種の薬剤にはそれぞれ一長一短があることを詳しく説明した。治療効果についてもその人ごとに違うことが分かってきており、治療効果の個別化、見える化が進んでいると解説、その薬を服用することで得られる効果がわかれば、副作用にもやや耐えられると述べた。

保坂先生はおなじみのやわらかい語り口で、がん患者の精神的なケアや、免疫力の高まる心の持ちようについて

ユーモアを交えて語り、同時にがんにかかるると本人の30%、家族の40%に精神症状が現れると説明し、家族への支援の必要性も訴えた。

南果歩さん 「CAN友」になりましょう と呼びかけ

続いて3月に乳がんの手術を受けたばかりの女優、南果歩さんが登場。がんがわかってからの経験や心の変化を率直に語った。「がんになってから、ささやかなことにも感動したり、涙もろくなったり、まるで自分を洗濯したような気持ち」と心境を語り、時に涙ぐむ場面も。「友人や周りの人に本当に助けられた。がん友という言葉もあるが、できるという意味を込めたCAN友(キャンとも)」という言葉で提唱します」と会場の参加者に呼びかけた。



様々な団体がブースを出展

第12回 ピンクリボンデザイン大賞

1日のスマイルウオーク東京大会の会場で、第12回ピンクリボンデザイン大賞の表彰式が行われた。今年もポスター部門とコピー部門の2部門を設け、ポスター部門937点、コピー部門14,293点、総数15,230点の中から各部門のグランプリ1点ずつの他、入賞作品併せて12点が選ばれた。また、ピンクリボン活動10周年を迎えた公式メッセンジャーのモモ妹から、コピー部門一点に特別賞が贈呈された。

ポスター部門グランプリは東京都の佐野りりこさん(25)、コピー部門グランプリは静岡県の大井慎介さん(42)、「モモ妹特別賞」は千葉県

の早川忠隆さん(27)がそれぞれ受賞した。

ポスター部門グランプリ作品は

コピー部門グランプリ

早期発見は、あなたにしかできない。

大井慎介さん(42歳) 静岡県

モモ妹特別賞

検診は
未来のあなたへの
贈りもの

早川忠隆さん(27歳) 千葉県

ター化し、交通広告や雑誌広告などに活用される。

ポスター部門グランプリ



佐野りりこさん(25歳) 東京都

佐野さんと大井さんにはクリエイテ

がんによる死亡確定数は37万346人で2243人増加

男女とも大腸がんの増加と胃がんの減少が目立つ

2015年厚労省人口動態統計(確定数)

厚生労働省は9月8日付で人口動態統計(2015年・確定数)を公表した。それによると昨年1年間にがんで亡くなった人は37万346人で、前年より2243人増加したことがわかった。死亡者の総数は129万444人で、死亡総数に占める割合は28.7%となった。がんによる死亡は1981年以来日本の死因の1位を続けている。

部位別にみると昨年に引き続き、大腸がん、肺がんの増加が目立った。大腸がんは4万9699人で前年より1214人増加した。肺がんは7万4378人で同じく982人増加した。

男女合わせての部位別死亡数は多い順に1位が肺がん(7万4378人)、2

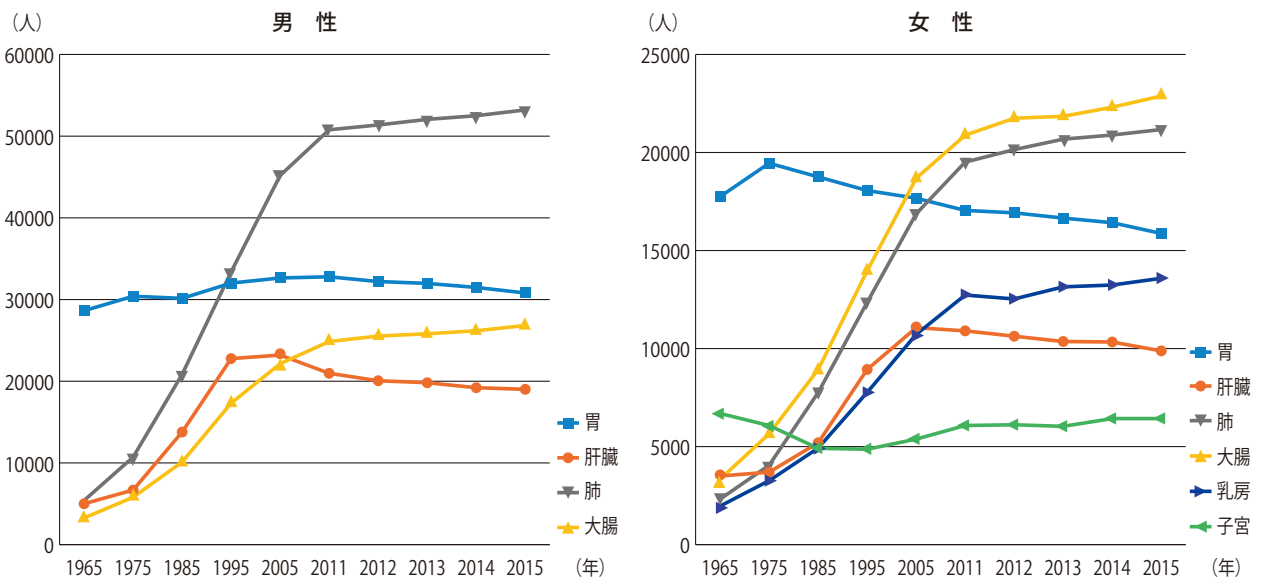
位が大腸がん(4万9699人)、3位が胃がん(4万6679人)、以下膵臓がん(3万1866人)、肝臓がん(2万8889人)と続く。

さらに男女別に部位別のがん死亡数をみると、男性では多い順に1位が肺がん(5万3208人)、2位が胃がん(3万809人)、3位が大腸がん(2万6818人)、次いで肝臓がん(1万9008人)、膵臓がん(1万6186人)と続く。男性で増加が目立つのは肺がん、大腸がん、膀胱がんでそれぞれ703人、641人、274人増加した。一方、胃がん、膵臓がん、肝臓がんはそれぞれ674人、225人、200人減少した。胃がんと肝臓がんの減少傾向は昨年に引き続きは

っきりと数字に表れてきた。

女性に目を向けると、死亡数が多い部位は1位が大腸がん(2万2881人)、2位が肺がん(2万1170人)、3位が胃がん(1万5870人)、次いで膵臓がん(1万5680人)、乳がん(1万3584人)と続く。女性で増加が目立つのは大腸がん、膵臓がん、乳がんで、それぞれ573人、375人、344人増加した。特に乳がんは昨年度増加に歯止めがかかったと見られていたが、今回は大きく増加に転じた。一方、胃がんと肝臓がんは男性と同様に、それぞれ550人、454人、卵巣がんは164人と大きく減少している。

男女別 主な部位別にみたがんによる死亡数の推移=厚生労働省の人口動態統計より作成(すべて確定数)



男性	1965	1975	1985	1995	2005	2011	2012	2013	2014	2015
胃	28,636	30,403	30,146	32,015	32,643	32,785	32,206	31,978	31,483	30,809
肝臓	5,006	6,677	13,780	22,773	23,203	20,972	20,060	19,816	19,208	19,008
肺	5,404	10,711	20,837	33,389	45,189	50,782	51,372	52,054	52,505	53,208
大腸	3,265	5,799	10,112	17,312	22,146	24,862	25,529	25,808	26,177	26,818
女性	1965	1975	1985	1995	2005	2011	2012	2013	2014	2015
胃	17,749	19,454	18,756	18,061	17,668	17,045	16,923	16,654	16,420	15,870
肝臓	3,499	3,696	5,192	8,934	11,065	10,903	10,630	10,359	10,335	9,881
肺	2,321	4,048	7,753	12,356	16,874	19,511	20,146	20,680	20,891	21,170
大腸	3,335	5,654	8,926	13,962	18,684	20,882	21,747	21,846	22,308	22,881
乳房	1,966	3,262	4,922	7,763	10,721	12,731	12,529	13,148	13,240	13,584
子宮	6,689	6,075	4,912	4,865	5,381	6,075	6,113	6,033	6,429	6,429

Special Report

リレー・フォー・ライフ・ジャパン2016滋賀医科大学 日本初のカレッジリレーを開催

滋賀県大津市の滋賀医科大で10月8日、9日の両日、日本で初めてとなる「カレッジリレー」が開催された。RFL発祥の国アメリカでは年間約600ものカレッジリレーが行われるほど盛んになっており、将来のがん征圧活動のリーダーを育成する場としても大いに期待されている。

滋賀県では2014年から近江八幡市でRFLJしが開催されていた。昨年ボランティアとして参加した滋賀医科大生の西明博さんが実行委員長となり、滋賀医科大の医学科や看護学科、滋賀県立大学などの学生だけで実行委員会を結成、前回までの実行委員や日本対がん協会の支援で初のカレッジリレーが実現した。

☆カレッジリレーとは☆

大学生が主体となって運営するRFLを「カレッジリレー」と呼びます。カレッジリレーには、通常のRFLに加えて次の意義があります。

【教育としての意義】 未来を担う若い世代の、がんに対する意識を高める「がん教育」の場となります。

また、本活動では、学生だけで委員会を組織し、寄付・協賛金を募り、広報活動を行い、参加者を募ります。そのことでリーダーシップ、交渉力、企画力など様々な社会的スキルが身に付けられる「社会教育」の場となります。

【がん患者への希望】 がん患者やその家族にとって、若い世代がRFLに取り組む姿は希望であり、大きな励みになります。学生ならではの若さ、活気、求心力、発信力を最大限に活用してがん征圧のための大きな後押しができればと考えています。



びわくんとわこちゃん

大学もバックアップ

当日は天候も心配されたが、大勢の学生や教職員、地元の医療関係者やがん経験者らが集まった。大学中庭の池の周りを囲む約250メートルのリレーウォークコースの中央にメインステージが設けられた。垣添忠生日本対がん協会会長が開会のあいさつを行った後、塩田浩平滋賀医科大学長、三日月大造滋賀県知事も駆けつけて、未来の医療を支える学生たちの活躍を激励し、昨年のRFLJしが実行委員会のメンバーを中心とするサバイバーズラップでにぎやかにスタートした。

グリーンケアの必要性呼びかけ



講演する垣添会長

ウォークが続く中、ステージでは次々と啓発企画が実施された。トップバッターは垣添忠生日本対がん協会会長で、「妻のがんとこれからのがん医療」と題して講演を行った。医師として国のがん対策に関わってきた立場から、また自身もがん経験者であり、最愛の妻をがんで亡くしたケアギバーであり遺族でもあるというさまざまな立場から、後輩である医師の卵たちに、これからのがん医療について熱く語りかけた。特にグリーンケアの重要性に触れ、「医師である自分と違い、何も情報のない人が突



笑顔でフィナルラップ

然家族の死に向き合うのは大変なこと。医療にグリーンケアを組みこむように呼びかけて行きたい」と話した。

「がんノート」が公開生放送



ニコニコ生放送中

この日の特別企画はネット生放送番組「がんノート」の公開生放送。若い世代のがん経験者代表として知られる岸田徹さんが、がん経験者の本音や現実をインタビューで明らかにし、広く社会に発信していこうというもの。今回のゲストはRFLJしがの初代実行委員長である谷本有佳子さん。谷本さんはジスト(消化管間質腫瘍)に罹患した当時の心境を「妻失格、母失格、嫁失格、患者失格と思って閉じこもっていた」と語り、がんによって夫婦関係が悪化したことや体力的、経済的にも苦しかったこと、一方子どもたちには最初から事実を伝え、前向きに励ましてもらったことなどを笑いを交えながらも赤裸々に語った。

この様子はニコニコ生放送でネット配信された。聞き手の岸田さんは「がんノートも回数を重ねてきたけど、リレー会場での放送は熱気が違いますね」と話す。会場の

学生たちも、医療者の卵として患者の現実にも真剣に聞き入っていた。

地域の課題解決の場として期待



埤田准教授と里親学生支援室の皆さん

今、滋賀県でも深刻な医師不足、看護師不足が問題になっている。滋賀医科大では県外からの入学生が多いこともあって、同窓生や地域住民が「里親」「プチ里親」になって学生の入学時から何くれとなく世話を焼いたり、地域の魅力を伝えたりすることによって、将来的に滋賀県の地域医療の担い手を育てることを目指す「地域『里親』プログラム」がある。

今回の実行委員会にはこの里親プログラムに参加している学生が多かったこともあり、RFLJ滋賀医科大学実行委員会顧問に就任したのが、同大里親学生支援室長の埤田(たおだ)和史准教授だ。埤田准教授は「学生も患者さんと交流したり本音を聞いて、患者さんの命を背負う覚悟を持つ機会になるのでは」と期待する。地域の医療関係者や患者が一堂に会するカレッジリレーは、学生を成長させる広場になっているようだ。

★ Close Up!

RFLJ滋賀医科大学実行委員長 西明博さん(滋賀医科大学6回生)

初のカレッジリレー開催の立役者、西明博さんの転機は東日本大震災だった。薬学部出身で、当時製薬会社の社員だった西さんは、ボランティアで被災地に赴くうちに、自分の手で直接人を支える医師の仕事がしたいと強く思うようになった。編入学試験を実施している医大を片っぱしから受験、何の地縁もない滋賀医科大へ入学した。

リレーとの出会いも滋賀に来てから。昨年、RFLJしがにボランティアとして参加し、エンブティテーブルを見ているうちに、病院実習で担当した患者さんの姿が思い浮かんだ。サバイバーでもあるしが実行委員の人たちとの出会いも大きかった。「病院で会う患者さんからは、例えば学生であっても、やはり医師の先生とみられる。どうしても壁があり、なかなかお互い素顔で話せることはなかったけど、実行委員の人たちは違いました。この出会いは僕にとって大きいですね」

カレッジリレーの開催を決意してから準備は「本当に大変でした」。実行委員は総勢27人、同大医学科と看護学科の学生を中心に、滋賀県立大の学生も3人加わった。立命館大の仲間も司会で応援してくれた。大学間のネットワークがあ

るので、メーリングリストで情報を流してメンバーを集めた。ダンスサークルの後輩も巻き込んだ。「学生で、サバイバーでもない

ので、どうして人によってリレーへの温度差はありました。それでもサバイバーとの交流会を企画し、リレーの目的を確認して気持ちを一つにした。みなで大学や教職員の協力も取り付け、講演を依頼し、プログラムを練った。記者会見をしたりラジオやテレビに出演したりと広報活動にも飛び回った。

ようやくこの日を迎えたが、実は今は卒業試験の真最中。来年2月には医師国家試験も控えている。「思うように勉強が進まず焦りを感じることもあります」とこの時ばかりは表情が曇ったが、関門を通り抜ければいよいよ臨床の現場に旅立つ。「はい、現場に出ていきます」とまっすぐな視線を向けてきっぱり答えてくれた。



西明博さん

夜半の土砂降りも経験



一夜明けて弾ける笑顔

何とかもっていた天気は夜になって崩れ、午前3時半ごろにすさまじい土砂降りになった。池に浮かべたHOPEをかたどったキャンドルが強風で流されたり、ルミナリエが飛ばされたり。学生や参加者たちはずぶぬれになりながらルミナリエに1つ

1つビニール袋をかいた。あまりの悪天候に閉会の前倒しも検討されたが、朝には何とか雨が上がり、無事24時間ウォークを達成した。2日目の朝に受付をしていた女子学生たちも「大変でした」と口々に語っていたが、そこは若さ、カメラを向けるとすぐ弾けるような笑顔を見せてくれた。



ハート型のルミナリエ

小学生からのがん教育の課題を議論

UICC日本委員会・日本癌治療学会合同シンポ

がん教育支援 横浜宣言2016発表

UICC(国際対がん連合)日本委員会と日本癌治療学会の合同シンポジウム「小学生からのがん教育」が10月22日、横浜市のパシフィコ横浜で開催された。

文部科学省が4月に「がん教育推進のための教材」や「外部講師を用いたがん教育のガイドライン」を公表したことを受け、実際に子ども

からのがん教育を進めていく上で、今何が課題になっているのだろうか。がん教育にかかわっている医師や患者団体、教育関係者ら13人からの報告があり、議論が交わされた。

シンポではまず、北川知行・UICC日本委員会委員長が、小学生からのがん教育の目的とその必要性について、①がん予防の姿勢を植え付ける②命の大切さを考えさせ、生きる力を与える③がんの仲間を暖かく支える心を育むこと——の3点を指摘。これを受けて、第1部「教材開発」、第2部「外部講師の確保と教員研修・育成システム」、第3部「がん教育の評価とフォローアップ」に分けて、現状の報告と議論が進められた。

文科省の教材に即した アニメ教材も開発

第1部では、文部科学省の「がん教育推進のための教材」作成メンバーだった中川恵一・東京大学医学部附属病院准教授が、教材の中での小学生版の内容や、中学高校生向けに日本対がん協会とがん教育のアニメ教材2作品の作成にかかわってきたことを紹介した。

このほど、その第3弾として文部科学省の教材の内容をクイズ形式で学べる新たなアニメ教材「よくわかる！が



「小学生からのがん教育」のシンポジウムで発表された「がん教育支援 横浜宣言2016」

んの授業」を作成したことも示し、その一場面を紹介した。中川准教授は「小学校でも十分に使えると思う」と、活用を呼びかけた。

また、豊島区の細山貴信・豊島区教育委員会統括指導主事は、2012年から区内の小学6年生と中学3年生を対象に、区が開発した教材でがん教育の授業を行っていることを紹介。小学校で学んだことを忘れてしまう中学生もいるが、「それぞれの発達段階で学ぶことが有効。がんにかかった人は生活習慣が悪かったから、とは思われないようにしたい。あくまでがんを予防するための一つの方法として、正しい生活習慣を身に付けようという視点で小学校から進めている」と話した。

がん教育にがん患者の視点を

また、天野慎介・全国がん患者団体連合会理事長は、自らの闘病経験を講演したときに、聴衆の中にいた小児がん経験者が、子どものときの治療のことや亡くなった患者仲間のことを思い出して気分が悪くなってしまったことを紹介。文部科学省の教材の小学生版の内容についても、「もう少し丁寧な説明を加えないと、場合によっては誤解や差別を生みかねない」と、小児がん経験者を含む、患者・家族への配慮

を反映させる必要性を示した。

がん教育を行う上で、医師やがん経験者ら外部講師をどう確保するかについて議論した第2部では、日本癌治療学会の立場から相羽恵介・東京慈恵医科大学教授が、日本がん治療認定医機構が認定している約1万5千人の「がん治療認定医」の多くが、日本癌治療学会員

であり、外部講師役として参画できるネットワーク作りに協力していきたいとの考えを示した。

また、患者の立場からとして、三好綾・NPO法人がんサポートかごしま理事長が、2010年からがん患者4人が小中高の教室に向いてがんの知識や、がん患者への正しい理解、命の大切さを教えている「いのちの授業」について紹介。小学生では32%が、中学生では41%が、「身近にがんになった人がいる」と答えていたアンケート結果も示し、がん教育の中で、がんになった人の視点を入れてほしいと訴えた。

思いやり教えるチャンスに

第3部では、小児がん専門家の立場から中川原章・佐賀県医療センター好生館理事長が、学校の中でがんと闘っている子供たちのことを考えることで「友情や思いやりを教える大きなチャンスになる」と、小学校からのがん教育で小児がんについて考える意義を指摘した。

シンポジウムでは最後に、この日の議論を生かそうと、がん教育での教材作成・改訂や講師の研修、確保などの支援を誓ったUICC日本委員会と日本癌治療学会の共同宣言「がん教育支援 横浜宣言2016」を発表した。

Topics

「For health with bicycle」を合言葉に

自転車レースでピンクリボン活動を応援



青空の下さわやかに走り出した

イオンバイク株式会社は10月16日、自転車と自転車レースの普及・促進を目的とした総合イベント「AEON幕張サイクルフェスタ AEONBIKEエンデューロ2016」で、乳がん検診を啓発するピンクリボンのチャリティを行った。自転車を楽しむ女性はもちろんのこと、その家族のためにも健康を大

切にしてほしいとの思いを込め、大会運営費の一部と会場での自転車メンテナンス料を日本対がん協会のほほえみ基金に寄付する。同社がイベントでピンクリボンのチャリティ活動をするのは2014年からで、今年で3年目となる。

会場は、千葉・千葉市の千葉県立幕張海浜公園で、エンデューロレース(制限時間内

に何週走れるかを競う耐久レース)やタイムレースなどが行われた。仲間・家族とチームを組んで走る3時間のチームエンデューロや、ロードレース初級者が個人でも気軽に参加できる2時間と3時間のソロエンデューロ、中学生対象のジュニアレース、小学生対象のキッズレースなど、参加者に応じた

イオンバイク株式会社

多彩なレースやイベントなどが開催された。会場には日本対がん協会もブースを出展し、触診モデルを使った乳がん啓発と募金活動を行った。また、レース後の表彰式で日本対がん協会の坂野康郎事務局長が寄付のお礼と乳がん検診の大切さを伝えた。

自転車愛好家の間でも年々知名度が上がっており、本年はおおよそ700人がエントリーした。晴天に恵まれた会場は参加者や家族らの歓声が響き渡っていた。



対がん協会ブースで啓発も

サポーター企業訪問

京セラ株式会社

サポーター企業を訪ねるシリーズの第2回目は京セラ株式会社本社です。宝飾応用商品事業部長の玉川雅樹さんに、セラミック製調理器具「ピンクキッチンシリーズ」の寄付についてお聞きしました。

—どのような寄付ですか？

弊社では2008年からセラミック製調理器具「ピンクキッチンシリーズ」を販売し、売上の一部を日本対がん協会の「乳がんをなくすほほえみ基金」へ寄付しています。

宝飾・キッチン関係の商品がメイン

の部署です。お客さまは女性が多く、特に社会や家庭で大きな役割を果たしている壮年期の女性の役に立つ社会貢献活動ができないかと考えました。



ミニ冊子入りのセット商品

商品パッケージには乳がんに関する情報をまとめたミニ冊子を封入し、お買い上げいただいた際に見ていただくことで啓発活動にもなっていると思います。ピンクキッチンシリーズは自信を持って販売している商品であり、この商品でピンクリボン活動を支援することは、女性の健康をサポートする活動を行っていることをお客さまに理解していただきやすいというのがこの活動の大きなポイントです。

—社内外でどんな変化を感じますか？

弊社は女性社員も多く、社内の啓発にも役立っていると感じます。乳がん検診についても、35歳以上の女性全員を対象にマンモグラフィとエコーを併用した乳がん検診を行っています。受診率は非常に高いようで、私の周りではほぼ全員が受診していると言えるほどです。ピンクリボン活動を支援する活動は販売店の方からも、よい反響をいただいていると聞いています。日

本国内だけでなく、米国、オーストラリア、台湾、中国、韓国などでもピンクリボン活動を支援しています。



玉川雅樹さん

—このような社会貢献活動を行う理由を教えてください

京セラの社是は「敬天愛人」(常に公明正大 謙虚な心で仕事にあたり 天を敬い 人を愛し 仕事を愛し 会社を愛し 国を愛する心)、経営理念は「全従業員の物心両面の幸福を追求すると同時に、人類、社会の進歩発展に貢献すること」です。当社としては、社会貢献活動はごく自然なことだと思っています。利他の心、人間として何が正しいのかをベースに考え、今後も事業に即した社会貢献活動を続けていきたいと思っています。

応募総数125件から20件を採択 2016年度RFLJ「プロジェクト未来」研究助成 決定

リレー・フォー・ライフに寄せられる寄付を基にがん研究を支援する「リレー・フォー・ライフ・ジャパン(RFLJ)プロジェクト未来」の、2016年度の採択者が10月6日に決定した。

この助成金は患者や家族、支援者の希望を実現するために、画期的ながん

の治療法や患者のQOL改善などを目指す日本国内の研究を助成するもので、今年で5回目となる。同助成金審査委員会での審査、ならびに日本対がん協会理事会の承認を得て、下記のとおり決定した。

応募総数は昨年の87件を大きく上

回る125件で、真摯な検討の結果I分野(基礎研究・臨床研究)が82件の中から11件、II分野(がんの支持療法、社会面に関する研究)が43件の中から9件、あわせて20件が採択された。採択者と研究テーマ、助成金額は下表のとおり。

分野I (基礎研究・臨床研究)

(五十音順、敬称略)

申請者名	所 属	申 請 テ ー マ	助成金額
縣 保年	滋賀医科大学 生化学・分子生物学講座	IPS細胞技術とゲノム編集を用いた効率のよいがん抗原特異的キラーT細胞の再生	100万円
大木 理恵子	国立がん研究センター研究所 希少がん研究分野	希少がんである神経内分泌腫瘍のがん抑制遺伝子PHLDA3の遺伝子診断による新しい予後・治療薬選択法開発～神経内分泌腫瘍の個別化医療を目指して～	100万円
大塚 基之	東京大学医学部附属病院 消化器内科	未来の癌予防法の確立をめざした加齢に伴う消化器癌の発生リスク増大の分子機構の解明	100万円
河田 健二	京都大学 消化管外科	骨髄由来細胞をターゲットした新規大腸癌治療法の確立	100万円
神奈木 真理	東京医科歯科大学 免疫治療学分野	成人T細胞白血病の発症予防ワクチンの開発	100万円
小島 研介	佐賀大学医学部 血液・呼吸器・腫瘍内科	白血病幹細胞の薬剤耐性、腫瘍内不均一性を打破し、二次発がん・再発をひきおこさない新たな分子標的治療戦略の臨床応用を目指した研究	100万円
関戸 好孝	愛知県がんセンター研究所 分子腫瘍学部	悪性中皮腫のがん抑制遺伝子の変異の特徴に基づく新規分子標的の探索	100万円
中西 真	東京大学医科学研究所 癌・細胞増殖部門 癌防御シグナル分野	細胞老化を標的とした革新的がん治療法・予防法の開発	200万円
長山 聡	がん研有明病院 大腸外科およびTR支援部	腸内細菌叢の変化による大腸癌発生のメカニズムの解明	100万円
浜本 隆二	国立がん研究センター研究所 がん分子修飾制御学分野	ヒストンメチル化関連酵素を標的とした大腸がん幹細胞に対する新規分子標的薬の開発	200万円
村松 正道	金沢大学 医薬保健研究域 医学系 分子遺伝学	がん細胞発生・悪性転化における変異源酵素APOBECの役割の検討	100万円

以上11名 合計1300万円

分野II (がんの支持療法、社会面に関する研究)

(五十音順、敬称略)

申請者名	所 属	申 請 テ ー マ	助成金額
明智 龍男	名古屋市立大学 精神・認知・行動医学分野	小児がん患者・家族に対する新たなサポートシステムおよびケア方法の開発研究	50万円
遠藤 源樹	東京女子医科大学 衛生学公衆衛生学第二講座	中小企業における、がんサバイバーの病休・復職等の実態調査と復職支援への応用	50万円
小澤 美和	聖路加国際病院 小児科	一般総合病院の機能を活かした小児がん経験者の人間ドックシステムによる晩期合併症とQOLの生涯コホート調査と自立的な健康管理能力の育成	50万円
近藤 俊輔	国立がん研究センター 中央病院 先端医療科	がん患者における労働生産性変化の実態調査(プレゼンティズム/アブセンティズムの解析から)	50万円
櫻木 範明	北海道大学医学部 産婦人科 (一社)ピーキャブ・PCAF	子宮頸がん検診受診率向上へ向けての地域住民および地方自治体に対する自己採取 HPV 検査の知識普及活動	50万円
白石 憲史郎	帝京大学医学部 放射線科	乳がんサバイバーの治療後二次発癌発症の調査研究	50万円
関 由起子	埼玉大学 教育学部	がんを患う高校生への学校教育支援：大学生による学習支援ボランティアの意義と効果について	50万円
全田 貞幹	国立がん研究センター 東病院 放射線治療科	放射線皮膚炎における Blinded objective grading system の構築を含む客観的評価方法確立に関する研究	50万円
古井 辰郎	岐阜大学大学院医学系研究科 産科婦人科学 医学部附属病院がんセンター	小児・思春期・若年成人がん患者の妊孕性温存に関する医療連携構築を目的とした社会システム作り(啓発・人材育成、各種資料作成、日本版 Oncofertility Consortium 構築とナビゲータ制度の提案)	50万円

以上9名 合計450万円